

新羅に於ける仏教受容の諸問題

——王族の出家を中心として——

福 士 慈 稔

目 次

はじめに	1
I 史料にみられる王族の出家	2
1 法興王	2
2 真興王	3
3 法興王妃	3
4 真興王母	3
5 真興王妃	4
II 金石文にみられる仏教関連記事	4
1 煞斑牛	5
2 金石文にみられる出家者	5
III 『花郎世紀』にみられる関連記事	6
1 異次頓説話と法興王	6
2 法興王から真興王への譲位の問題	8
3 真興王母を中心とする女性の権力構造	9
さいごに	12
注	12

は じ め に

近年、中古期新羅史研究は度重なる金石文の発見により新たな展開を迎えている。新羅六世紀時の王権論、それに伴う官位制・六部の問題などの政治制度史的研究成果が発表され、また制度史研究の手法を以てする僧官制・寺典等の仏教統制機関に関する研究も学会に於て注目を集めている。しかしながら、それら仏教に関する研究は史料上の制限から、対象が七世紀中葉以降に限られ、必然的に仏教公認、及びそれを契機とする新羅六世紀時の仏教受容形態に関する言及は少ない。また王権とそれに付随する研究は六世紀を対象とするものの、新羅仏教受容初期の問題である王の出家、及び王妃の出家という異常なる事柄に関しては、沈黙を守り、いや寧ろ意図的に無視している感すらする。しかしながら王権が固まりつつあった新羅六世紀の法興王・真興王

という最高権力者の出家をどのように取り扱うのか、つまり日本の皇位継承権を有していた古人大兄皇子や大海人皇子等の出家⁽¹⁾、または梁の武帝の白衣の菩薩的形態と同一視すべきかどうか、最高権力者の出家自体に様々な問題が内在していることもあり、中古期新羅史研究・新羅仏教史研究にとって最初期に取り上げられるべき問題と考えられる。よって、この小論では新羅仏教受容初期の形態、特に法興王・真興王を中心とする王族の出家とそれに伴う権力構造に関して、現存の利用に耐えうるとされる史料と数年前に韓国で発見された筆者が真撰と考える『花郎世紀』⁽²⁾を併用することによって、若干の問題提示を試みるものである。

I 史料にみられる王族の出家

新羅への仏教伝来年次に関しては、伝來說話が多々あるものの未だ定説はない。現在のところ、高句麗及び百済という隣接国から緩やかに浸透したものであり、照知王（在位479～500）代の宮中の梵僧の存在を併せ⁽³⁾、照知王以前には伝わっていたものと考えられるが、ともかくも、伝来年次が確定できないことから、法興王十四年（527）⁽⁴⁾の仏教公認を新羅仏教の始年とする。そして、その仏教を公認した法興王をはじめ、公認以後、真興王や王族の女性達の出家が史料にみられるが、これは三国の中では新羅だけにみられる特異な現象である。以下、諸史料により、出家したとされる人物を列記し個々の問題点を挙げていくこととする。

1 法興王

仏教を公認した新羅第二十三代法興王に関する仏教関係の記載は、『三国史記』新羅本紀では、

（イ）十五年。肇行仏法。（異次頓説話）。

（ロ）十六年。下令禁殺生。

（ハ）二十七年秋七月。王薨。諡曰法興。葬於哀公寺北峯。

以上である⁽⁵⁾。法興王十五年（この小論では法興王十四年、527年⁽⁴⁾）の「肇行仏法」と十六年（528）の「下令禁殺生」のみ窺えるにすぎず、法興王出家の記事はない。しかし、『三国遺事』巻第三によると興輪寺完成に期し、「冕旒を謝して方袍を披き、宮戚を施して寺隷と為し、主として其の寺に住し、躬ら弘化に任ず」とし、更に「真興すなわち徳を継ぎ聖を重ね、衰職を承け九五に処り、威は百僚を率い号令畢く備はる。因って額を大王興輪寺と賜ふ。前王の姓は金氏、出家して法雲といい法空と字す」⁽⁶⁾として、法興王が出家し興輪寺に住したことが記されている。また『海東高僧伝』巻第一法空条にも「王、位を遜きて僧と為り、名を法空と改め、三衣と瓦鉢を念ひ、志も行いも高遠にして一切を慈悲せり」⁽⁷⁾とある。『三国遺事』巻第三・『海東高僧伝』巻第一には法興王の出家が記されているのである。法興王の仏教公認に関しては、『三国史記』・『三国遺事』・『海東高僧伝』の三史料に、共に異次頓の殉教を契機とした法興王の公認の記載があり、法興王を主体とする仏教公認の記載は一致する。しかし、法興王の出家は記さずに異次頓説話と三件の仏教記事しか記されていない『三国史記』、法興王の出家を記している『三国遺事』、出家は勿論、各僧侶の伝の中に法空条として法興王の伝を設けている『海東高僧伝』とでは、史料の性質上からか仏教公認後の記載に隔たりがみられ、どの史料に重点を置くか問題となるとところである。

2 真興王

第二十四代真興王（在位540～576）は、法興王の娘只召と法興王の弟立宗葛文王との子とされる。真興王の幼年即位による王太后の摂政で⁽⁸⁾、王幼年期に於ける仏教事業の主体を誰にするか問題となるところであるが、ともかくも、『三国史記』新羅本紀による真興王代の仏教関係の記載は

- （イ）五年春二月。興輪寺成。三月。許人出家為僧尼奉仏。
- （ロ）十年春。梁遣使与入学僧覚徳送仏舍利。王使百宮奉迎興輪寺前路。
- （ハ）十四年春二月。王命所司。築新宮於月城東。黄竜見其地。王疑之。改為仏寺。賜号曰皇竜。
- （ニ）二十六年。陳遣使劉使与僧明観来聘。送釈氏経論千七百余卷。
- （ホ）二十七年春二月。祇園實際二寺成。立王子銅輪為王太子。遣使於陳。貢方物。皇竜寺畢功。
- （ヘ）三十三年冬十月二十日。為戦死士卒。設八閨筵会於外寺。七日罷。
- （ト）三十五年春三月。鑄成皇竜寺丈六像。銅重三万五千七斤。鍍金重一万一百九十八分。
- （チ）三十六年。春夏旱。皇竜寺丈六像出涙至踵。
- （リ）三十七年。秋八月。王薨。諡曰真興。葬于哀公寺北峯。王幼年即位。一心奉仏。至末年祝

髮被僧衣。自号法雲。以終其身。王妃亦效之為尼。住永興寺。及其薨也。国人以礼葬之。以上の九件である⁽⁹⁾。真興王五年（544）に、人が出家し僧尼となり仏を奉ずることを許したこと、真興王十年の入学僧覚徳の帰朝、仏寺の建立、八閨筵会、そして、末年に祝髮し僧衣を被り法雲と号し、また王妃が出家し尼となり永興寺に住したこと等が記され、ここで特に、正史である『三国史記』に真興王の出家が明記されている点が注目される。さらに出家に関しては『海東高僧伝』巻第一には詳細に「王、幼年にして祚に即きたれども、一心に仏を奉じ、末年に至り祝髮し浮屠と為り、法服を被り自ら法雲と号し、禁戒を受持し三業清浄となり、遂に以て終焉せらる」⁽¹⁰⁾ としている。

3 法興王妃

法興王妃の出家は『三国遺事』巻第三では「初めて役を興せる乙卯の歳、王妃も亦、永興寺を創す。史氏の遺風を慕い、王と同じく落彩して尼となり、妙法と名のり、亦、永興寺に住すること有年にして終れり」⁽¹¹⁾ とし、『三国遺事』王暦では「妃巴丑夫人、出家して法流と名のり永興寺に住せり」⁽¹²⁾、そして、『海東高僧伝』巻第一には「王妃も、亦、仏を奉じて比丘尼となり、永興寺に住せり」⁽¹³⁾ とある。この中で記載箇所王に王妃名を明記しているものは『三国遺事』王暦だけである。勿論、法興王の妃名に関しては諸史料によって、巴丑・巴刁・保刀・保道と当時の借字表記法によって表記が異なり若干の混乱がみられ⁽¹⁴⁾、また出家名も『三国遺事』巻第三と王暦では「妙法」と「法流」というように一致していない。

4 真興王母

真興王母の出家に関しては、『三国遺事』巻第一の「第二十四真興王、即位の時、年十五歳なり。太后、政を摂す。太后、乃ち法興王の女子にして立宗葛文王の妃なり。終る時、髪を削り法衣を被りて逝く」⁽¹⁵⁾ という記載によって知られるのみで、王母の名も『三国遺事』王暦「第二十四真興王、多麥宗と名く、一に深麥宗と作る。父、即ち法興王の弟、立宗葛文王なり。母、只召夫人、一に息道夫人に作る」という記載によって、ようやく法興王の娘只召と確認されるだけである。

5 真興王妃

法興王妃および真興王母の出家が『三国史記』に記されていないものの、真興王妃に関しては、『三国史記』巻第四真興王三十七年条の真興王の出家及び死去に伴う「王妃、亦これに效い尼となり、永興寺に住す」⁽¹⁶⁾ という記載と、同じく巻第四真平王三十六年条の「真興王妃比丘尼死す」⁽¹⁷⁾、以上の二件が記されている。また『三国遺事』王曆真興王条には「(真興王) 妃は忠刁夫人、英失角干の女なり。剃髪して尼となる」⁽¹⁸⁾ と記載され、真興王妃の出家が知られている。しかし、真興王妃の名が、『三国遺事』王曆真興王条では「忠刁」、同じ王曆真智王条では「思刀」及び「色刁」とされ⁽¹⁹⁾、『三国史記』では「思道」というように⁽²⁰⁾、借字表記法によって(『花郎世紀』によると、そればかりとは思われないが) 若干の混乱がみられ、また『三国遺事』の撰者一然が「按ずるに真興は乃ち法興の姪子なり。妃の思刀夫人は朴氏にして、牟梁里の英失角干の女なり。亦、出家して尼と為りたれども、而も永興寺の創主には非ざるなり。則ち恐らくは『真』の字は当に『法』に作るべし、法興の妃たる巴刁夫人が尼となりたる者としての卒せることを謂うなり。乃ち寺を創し像を立つるの主なるが故なり」⁽²¹⁾ として、真興王妃の出家に疑問を呈している。⁽²²⁾

これら三人の女性は、出家後、永興寺に住したとされ、法興王・真興王の興輪寺と女性達の永興寺という二寺の存在が問題となる。興輪寺の完成は『三国史記』により544年とされるが⁽²³⁾、『三国史記』には着工年が記されていない。ここで『海東高僧伝』⁽²⁴⁾ 及び『三国遺事』巻第三原宗興法条⁽²⁵⁾ の記載により534年または535年と考えられるが、しかしながら『海東高僧伝』では興輪寺の完成後に法興王が出家したとしており、興輪寺の完成を法興王死後の544年とする『三国史記』とでは矛盾する⁽²⁶⁾。永興寺の創建⁽²⁵⁾ は興輪寺と同様、534年または535年とされる。しかし、史料によると興輪寺と異なり、永興寺の着工年と竣工年が区別されておらず、この年に全てを包含すべきかどうか問題である。また出家した人物の名が、借字表記によるものなのか判然としないが、史料によって異なっており、また出家名の混乱もあり、『三国遺事』原宗興法条の傍注には「僧伝は諸説と与に亦た王妃を以て出家して法雲と名づく。又、真興王を法雲と為す。又、真興の妃を以て法雲と名づく、と為す。頗る疑混多し」⁽²⁷⁾ という記載もある。

さて、以上のように現存史料により法興王・法興王妃・真興王・真興王母・真興王妃、王族五名の出家が知られるのであるが⁽²⁸⁾、史料には個々の出家の事実のみ記されているにすぎず、また、それら史料も高麗時代の成立であり史料相互に交錯がみられることから、先に述べたように、個々に問題が内在し上記史料を用いる研究では、それ以上の解明は不可能に近く、金石文等の新たな史料からの考察が必要となるのである。

Ⅱ 金石文にみられる仏教関連記事

近年の韓国に於ける金石文の発見は、朝鮮史研究に新たな史料を提供し、特に新羅史研究の分野には新たな多くの問題点を提示している。代表的なものは、1970年12月発見の「蔚州川前里書石」(慶尚南道蔚州郡斗東面川前里)、1978年1月発見の「丹陽赤城碑」(忠清北道丹陽郡丹陽邑下坊里)、1979年4月発見の「中原高句麗碑」(忠清北道中原郡可金面龍田里)、さらに1988年4月に発見された「蔚珍鳳坪碑」(慶尚北道蔚珍郡竹辺面鳳坪里)、1989年4月発見の「迎日冷水碑」(慶尚北道迎日郡神光面冷水二里) などである。これら金石文から如何なる仏教関連記事をみいだ

せるか否かである。

1 煞斑牛

先ずは、「蔚珍鳳坪碑」・「迎日冷水碑」に、直接的に仏教と関わりはないが仏教受容の前段階の興味深い「煞斑牛」という儀礼のことが記されている。「蔚珍鳳坪碑」には「新羅六部煞斑牛□□事」とあり、また「迎日冷水碑」に「了事煞牛拔語故記」とあるのがそれである。「蔚珍鳳坪碑」に関しては李成市氏の詳細な研究がある⁽²⁹⁾。李氏は朝鮮半島に於ける殺牛の祭祀・儀礼の事例を挙げ、この「煞斑牛」は処罰に先立つ宗教儀礼とする。これに対して深津行徳氏は、「迎日冷水碑」の「煞牛」の用例から必ずしも刑の執行に先立つ儀式と解釈する必要はないとするも⁽³⁰⁾、ともかくも、二氏共に「煞斑牛」の儀礼を「天に対して誓いを立てる殺牛の祭祀儀礼」とする点では一致する。「迎日冷水碑」の立碑年は503年、そして「蔚珍鳳坪碑」の立碑年は524年とされ、527年の法興王による仏教公認、及び529年の殺生禁止令以前の祭祀儀礼として興味深い⁽³¹⁾。仏教公認後、斑牛及び他の動物を犠牲にする祭祀は、深津氏によると⁽³²⁾『三国史記』文武王条にもみられるとされるが⁽³³⁾、氏のいうように、その記事は『旧唐書』百濟伝をベースにして、『資治通鑑』等、他の中国史書を参照して作られたもので、『三国史記』にオリジナリティはないとされる記事である。また文武王代にその儀礼があったとしても、儀礼時に新羅の主体性が感ぜられず、その後「煞斑牛」を伴う祭祀の記載が諸史料にみられないことから、少なくとも「斑牛」を犠牲とする祭祀が仏教公認以前にあったが、公認後の殺生禁止によってその祭祀が公的には廃止された可能性が窺われ、後述するが、法興王の仏教公認直後の「下令禁殺生」と考え合わせ、公認当初の信仰形態を窺う史料となりうるものである。

2 金石文にみられる出家者

次に、直接的な仏教関係の記載は「蔚州川前里書石」乙卯年（535）銘にみられる「乙卯年八月四日聖法興大王節道人比丘僧安及以沙你僧首乃至居智伐村衆士□人等見記」という記録である⁽³⁴⁾。この中にみられる二人の人物に関しては、「道人比丘僧の安及以」と「沙你僧の首乃至」とする向きがあるが⁽³⁵⁾、「僧安」と「僧首」とも考えられる⁽³⁶⁾。ともかくも、ここで重要なことは興輪寺及び永興寺の創建工事着工直後に、新羅僧と思われる僧侶の名が知られることである。出家の形態、つまり師僧の問題、受戒・得度の問題が存し⁽³⁷⁾、仏教公認まもない新羅に於てどのようなプロセスを経てこれ等の人物が出家したのか問題となるところであるが、立碑年により最初期の僧侶名がこの金石文によって知られることは興味深い。

次に、王族の出家に関する手掛かり、例えば、王の出家名などは金石文にはみられないが、しかし、金石文を中心とする王号の研究により、法興王・真興王という王号が諡号ではなく生時に於ける諱に代わる尊崇の実名であり僧侶界の聖王観の産物であった、という興味深い指摘や⁽³⁸⁾、著名な真興王磨雲嶺碑（1929年発見）の「（表面）太昌元年歲次戊子□□廿一日□□真興太王巡管境刊石銘記也（略）——（裏面）于時隨駕沙門道人法藏慧忍（略）——」⁽³⁹⁾という、568年の真興王の東北境への巡狩に随駕した二人の僧侶、法藏、慧忍の存在などから、王と僧侶の密接な関係が窺われる。ここで、金石文に王族の出家名が記されていないことから出家年を確定することは出来ず、また「蔚州川前里書石」己未年（539）銘には、法興王妃が「另即知太王妃乞支妃」

つまり「夫乞支」という世俗名で記されていることから⁽⁴⁰⁾、この時に法興王妃が未だ出家していなかったのか、出家していたとしても王族全ての出家名が金石文に見られないことから、金石に刻す場合、王族は世俗名で刻すこととなっていたのか、問題が多々残るところである。

ともかくも、金石文には新羅仏教史解明の直接的になる刻記は多くはないが、二次的といえども興味深い記載が存し、個々の解明は仏教史研究に必要不可欠なる課題といえる。

Ⅲ 『花郎世紀』にみられる関連記事

『花郎世紀』に関する研究は、真偽問題を中心として多くの論文が発表されている⁽⁴¹⁾。議論の展開が待たれるところであるが、筆者としては、発見の『花郎世紀』は金大問の『花郎世紀』をかなり忠実に筆写したものであり、内容上の問題とされる現存史料と異なる記載は、『三国史記』・『三国遺事』などの矛盾・不備を取り除く記載であり、基本的には、体裁上の問題も幾度もの筆写に因って生じた、という立場に立っている。

さて、『花郎世紀』は花郎集団の指導者たる歴代花郎（風月主）の伝記を記しているものである。そして、個々の伝記の中に新羅史研究の上でも興味深い記述が多々みられる。仏教に関しては新羅六世紀時の仏教事情を窺う事項として、「新羅仏教公認説話の異次頓の出自に関する記載」、「智明・円光・慈蔵、特に円光の出自とその伝記に関する記載」、「花郎集団と仏教思想の融合時に関する記載」などがみられ⁽⁴²⁾、また一次的記載ではないが「王族の出家に関する記載」、それに関連する「只召を中心とする王族の女性の権力構造に関する記載」などがみられる。以下、これらの記載を総合的に検討し問題提示を行なうこととする。

1 異次頓説話と法興王

異次頓説話に関しては、『三国史記』⁽⁴³⁾・『海東高僧伝』⁽⁴⁴⁾・『三国遺事』⁽⁴⁵⁾に大同小異なる記載がある。煩瑣になるが問題点の多い『三国遺事』の当該箇所を以下に挙げる。

新羅本記に、法興大王即位十四年、小臣異次頓は法のために身を滅す、と。即ち簫梁の普通八年丁未、西竺の達磨が金陵に来れるの歳なり。是の年、朗智法師も、亦、始めて靈鷲山に住して法を開く。則ち大教の興衰は必ず遠近相感ずること一時なり。此に於て信ずべし。元和中に南淵寺の沙門一念は觸の香墳礼仏の文を撰し、此の事を載すること甚だ詳らかなり。其の略に曰く。昔、法興大王なるもの有り、紫極の殿に垂拱し、扶桑の域を俯察す、以謂らく、昔、漢の明は夢に感じ、仏法東流す、寡人、登位してより、願わくば蒼生のために福を修し罪を滅するの処を造らんと欲す、と。是に於て朝臣、未だ深意を測らず。唯だ国を理むるの大義に遵ひ、寺を建つるの神略に従はず。大王、嘆じて曰く、於戯、寡人、不徳なるを以て大業を承けず、上は陰陽の化を虧き、下は黎庶の歡無く、万機の暇に心を釈風に留む、誰をか与に伴となさん、と。粵に内養の者あり。姓は朴、字は厭觸。其の父は未だ詳らかならず。祖は阿珍宗、即ち習宝葛文王の子なり。竹柏を挺して質となし、水鏡を抱いて志となし、善を曾孫に積み、宮内の爪牙、聖朝の忠臣たらんことを望み、河清の登侍を企つ。時に年二十二なり。舍人、当充して龍顧を瞻仰し、知情撃目し、奏して云く、臣聞く、古人は芻蕘に問策すと、願はくば危罪を以て啓諮せんことを、と。王曰く、爾がなす所に非ず、と。舍人曰く、国のために身を亡ぼすは臣の大節なり、君のために

命を尽くすは民の直義なり、謬を以て辞を伝へ、臣を刑し首を斬らば、万人咸く伏し、敢て教に違はじ、と。王曰く、肉を解き軀を秤りて将に一鳥を贖はんとす、血を洒ぎ命を摧きて自ら七獣を怜む、朕は人を利せんことを意とす、何ぞ罪無きを殺さん、汝は功德を作すと雖も罪を避くるに如かず、と。舍人曰く、一切の捨て難きは身命よりも過ぎず、然れども、小臣、夕べに死して大教が朝たに行はるれば、仏日再び中し、聖主、長安ならん、と。王曰く、鸞鳳の子は幼にして凌霄の心あり、鴻鵠の児は生まれながらにして截波の勢を懷く、爾、是の如きを得たり、大士の行と謂ふ可きか、と。焉に於て大王は権りに威儀を整え、東西に風刀し、南北に霜仗し、以て群臣を召して乃ち問ふ、卿等、我に於て精舎を造らんと欲す、故に留難を作せり、と。是に於て群臣戦戦として兢懼し、僣倖して誓を作し、東西に指手す。王、舍人を喚びてこれを詰る。舍人、色を失ひ、辞として以て対ふる無し。大王、忿怒して勅してこれを斬らしむ。有司、縛して衙の下に到る。舍人、誓を作し、獄吏、これを斬るに白乳の湧出すること一丈なり。天は四もに黯黹とし、斜景これがために明を晦くし、地は六たび震動し、雨花はこれがために飄落し、聖人は哀戚して悲涙は龍衣を沾ほし、蒙幸は憂傷して輕汗を蟬冕に流す。甘泉忽ち渴し、魚鼈争ひ躍り、直木先づ折れ、猿猱群がり鳴き、春宮に鑣を連ぬるの侶は泣血して相顧み、月庭に袖を交ふるの朋は断腸して別れを惜しみ、柩を望み声を聞き、考妣を喪ふが如く、咸な子推の割股を謂ふも未だ其の苦節に比するに足らず。弘演の刳腹も詎んぞ能く其の壮烈に方べん。此れ乃ち丹墀の信力を扶け、阿道の本心を成す。聖者なり。遂に乃ち北山の西嶺に葬る。⁽⁴⁶⁾

以上のような説話であり、この他に、傍注に異説が記されている。しかし、上記掲載部分が、一然が『三国遺事』を撰した当時、流布していた異次頓伝（一念の『觸香墳礼仏結社文』、以下『結社文』）と考えられる。僧侶による編纂ということで若干神異面を強調しすぎ、この中の史実なる部分を湮滅させている感があるが、ともかくも、ここで問題となるのがこの説話の中心人物たる異次頓（厭觸）の実在性である。一然は傍注で金用行撰の『阿道碑』を引き「舍人、時に年二十六、父は吉升、祖は功漢、曾祖は乞解大王なり」とする記載を提示するが、『結社文』では「其の父は未だ詳かならず。祖は阿珍宗、即ち習宝葛文王の子なり」として、父は未詳であるが祖は習宝葛文王たる阿珍宗であるとする。『三国史記』及び『海東高僧伝』には何ら異次頓の出自に関して記しておらず、ただ『三国遺事』のこの『結社文』の引用によってのみその出自の一端を窺えるのにすぎない。傍注記載の人名比定が困難であり、また『結社文』に於ても異次頓と阿珍宗との関係が分断されていることから、仏教公認の立役者たる異次頓は謎なる人物とされてきた。しかし、『花郎世紀』によると阿珍宗に関し、「苜宗公父曰阿珍宗母曰宝玉公主」⁽⁴⁷⁾として、苜宗公の父として記されている。『花郎世紀』の阿珍宗の記載はこの箇所のみであるが、苜宗公に関しては、法興王の娘只召との間に世宗殿君と淑明をもうけた人物として記されている⁽⁴⁸⁾。『花郎世紀』の苜宗公の記述はそれ以外にはないが、『三国史記』列伝の傍注には、苜宗公が異斯夫の異名として記されている⁽⁴⁹⁾。異斯夫は智證王・法興王・真興王代にわたる有名な將軍であり、新羅の官等十七位のうちの第二位伊湊にいた人物である。ここで苜宗公が阿珍宗と宝玉公主との子であり、異次頓が阿珍宗の孫であり、また苜宗公と法興王の娘只召と関係があり何人かの子をもうけていたとしても、直ちに苜宗公と異次頓の関係を断定できはしないが、『花郎世紀』にみられる親の一字を子供が受け継ぐ事例を鑑みれば（一次的なる証拠とはなりえないが）、異次頓と異斯夫の関係を推察することも可能となる⁽⁵⁰⁾。

新羅の仏教公認に於ける異次頓の役割は大なるものがあるも、今まではその役割に比して出自不明にして官職も高くなく奇異なるものがあつた。しかし、特に『花郎世紀』の発見により⁽⁵¹⁾（もちろん金用行撰の『阿道碑』記載の系譜の解明も問題なるが）彼が所謂名門の出であり、その法興王の外孫、王族の一人である彼が仏教を信奉し殉教したと考えられることで、仏教受容初期に於けるこの説話の重要性が改めて浮かび上がってくる。異次頓の出自が曖昧で、且つ『三国史記』に仏教を公認した法興王の仏教関係の記載が少なく、また527年の公認から興輪寺の工事着工（一説によると再開）まで7年も間があることから、仏教公認を534年または535年とする説もあるが⁽⁵²⁾、『花郎世紀』等による異次頓の出自分明により、異次頓の実在性とその史実性、及び自分の孫を殉教させてまでも仏教を公認した法興王の仏教に対する期待が窺われよう。よって『花郎世紀』記載の異次頓王族の推察が許されるならば、527年の異次頓殉教による仏教公認の史実性と仏教公認に於ける法興王の主体性が窺われるものと思われる。

2 法興王から真興王への譲位の問題

さて、法興王・真興王は実際に出家したのか、出家したならばその原因は何か、そして出家後に政権は誰に委ねたのかということが問題となる。これに関しては法興王から真興王への政権移行の解明が一つの手掛かりとなると思われる。つまり、『三国史記』・『三国遺事』等では真興王即位に際し王が幼少の為真興王母摂政が記されているが⁽⁵³⁾、しかし、法興王から真興王への移行に関して『花郎世紀』は興味ある記事を提供している。つまり、『花郎世紀』魏花郎条に「只召太后、當国す。而して花郎を置き、（魏花郎）公をもってその首となして号して風月主と曰ふ。只召は保道の女なり。立宗公の夫人となりて真興大王を生む。而して法興大王は玉珍宮主を愛で、（真興を）立つる意なし。只召、これを憂う。（魏花郎）公、すなわち玉珍に大義を曉す。而してこれ（真興）、立つ。時人、これを義とせざるなし」⁽⁵⁴⁾、「（魏花郎）公の子孫、はなはだ繁くして、長女玉珍宮主、次女金珍夫人、すなわち吾道夫人の生むところなり。玉珍、初め英失公に嫁ぐも、未だ幾ばくならずして、幸を法興大王に受け、比臺公を生む。大王、（比臺公を）立てて太子となさんと欲す。（魏花郎）公、これを諫めて曰く、臣の女は骨品なし、而して且つ英失と混じる処、恐らくは未だ可ならざるなり、と。法興崩ず。只召太后、比臺公を王子〔太子〕の位より降ろし、もって（魏花郎）公、祀を奉る」⁽⁵⁵⁾

若干解釈が困難であるが、法興王は周囲の反対をおしきって比臺を太子とし、法興王の死後只召等は比臺を王子〔太子〕の位から降ろして真興を王とした、ということになる。ここで、法興王在世中は出家の有無にかかわらず法興王の意向が反映され、法興王滅後に法興王の意向に反し真興王が即位したということから、法興王から真興王への移行は若干の問題があつたことが窺える。

更に、現存史料によると法興王の出家に伴った筈の法興王妃の出家が、『花郎世紀』では「玉珍、専ら法興に寵せられ、保道をして尼となし、（魏花郎）公をもって臣となす」⁽⁵⁶⁾として、王の寵がなくなった結果出家させられたという受動的なものとなっている。しかし、先述したように、その出家させられた筈の法興王王妃が、「蔚州川前里書石」己未年銘には出家名ではなく「夫乞支」という世俗名で刻され、539年7月3日の段階で出家していたのか否か判然としていない。金石文の解釈の問題如何となるが、解釈によっては「蔚州川前里書石」己未年銘の中心人物を「立宗葛文王」（徙夫知葛文王）、「真興」（徙夫知王子郎□□夫知）⁽⁵⁷⁾、「夫乞支」を比定することが可能と

考えられる⁽⁵⁸⁾。ここで先述したように、『花郎世紀』による法興王の比臺立太子と、法興王死後の廃太子という記述を考慮すると、王位継承をめぐる法興王・玉珍・比臺と法興王妃・只召・立宗葛文王の対立を想定することが可能と思われる。とすると、539年7月3日の段階で法興王に対立する集団が形成されていたことになる。その場合、法興王が出家したとするならば、はたして信仰に基づく純粋なる出家とすることが出来るかどうか、つまり王位継承の混乱時にそのようなことが可能であったかどうか疑問である。

3 真興王母を中心とする女性の権力構造

真興王の出家に関しては、摂政只召の存在、つまり王族女性達の権力構造の解明が重要な問題となると考えられる。現存史料によると、真興王即位後、王幼少の爲の真興王母只召の摂政が記されており⁽⁵⁹⁾、法興王後の体制が只召と立宗に移行し、以後その体制がある程度継続したものと考えられる。ここで立宗の仏教信仰に関しては不明であるが、只召に関して『花郎世紀』に「(二花郎)公、淑明公主と永興寺に出居し仏道に専心す。(只召)太后も、亦、これが爲に帰依し、青[肅]太子[王子]も、亦、落彩受戒す」⁽⁶⁰⁾と記載され、真興王在位の末期に只召が娘の淑明の出家を契機に出家したことが知られ、『三国遺事』と同様に只召の出家が窺われる。ここで真興王幼年時に於ける一連の仏教事業の主体を只召に比することが妥当なことであるかどうか、問題となるところである。一次的なる論拠とはなりえないが、『花郎世紀』によると、花郎の始源たる源花の任命が、俊貞・南毛以前の源花に関しては調べる術はないが、俊貞・南毛に関しては「三山公の女、俊貞、源花となりて多く郎徒を置く。ここに至り、法興大王の女、南毛公主は、すなわち百済の宝果公主の生めるものなり、亦、絶色をもって(未珍夫)公と篤好たり。太后、公を愛でて而して南毛を右けて立てて源花となさんと欲す」⁽⁶¹⁾という記載から、俊貞の任命は明瞭ではないとしても⁽⁶²⁾、南毛が只召によって任命されていることが窺われる。ここで源花の廃止に伴った男性花郎、及び歴代花郎が誰によって任命されたのか記すと、次表のようになる。

以上のように、善利から庚信までは、前代花郎が主体となる譲位のように記され任命者の存在が不明瞭となっているが、しかしながら、魏花郎から二花郎までは只召によって任命されていることが窺われる。真興王代は、対高句麗・百済との戦の中で新羅の領土を拡張させ新羅統一の基盤を築いた時期であり、その新羅隆盛時の勇猛果敢なる真興王の代の女権の存在を疑問とする向きがあろうかと思うが、王幼年即位にして王母摂政という諸史料の記載と『花郎世紀』の記載を鑑みれば、ある程度の只召政権の存続が考えられ、真興王幼年時の仏教事業の主体を只召に比することの妥当性が窺われる。

歴代花郎	任 命 者	典 拠
1 魏花郎 (在位539～?)	只召	(只召) 太后、すなわち源花を廃し、仙花をもって花郎となす。その衆を号して風月と曰い、その頭を号して風月主と曰ふ。魏花公がこれに主たり、(未珍夫) 公、これに副たり。 ⁽⁶³⁾
2 未珍夫 (?～548)	(不明、恐らくは只召か)	
3 毛 郎 (548～555)	只召	(毛郎は) 太后に寵あり、真興大王九年、太后、命じて三世風月主となす。 ⁽⁶⁴⁾
4 二花郎 (555～562)	只召	(只召) 太后、すなわちこれに居すことを命じて、もって四世風月主となし、郡縣を巡らしむ。 ⁽⁶⁵⁾
5 斯多含 (562～563)	(只召または真興王)	太后、すなわち(斯多含を) 宮中に召して、食を賜いてその懐人の道を問う。斯、曰く(略)。太后これを奇として(真興) 大王にいい、貴幢となし、もって宮門を掌らしむ。 ⁽⁶⁶⁾
6 世 宗 (563～572)	(只召または真興王)	美室、すなわち世宗に勸めて曰く(略)。世宗これを然りとし、すなわち(只召) 太后に説きて旨を得、六世風月主となり、(略) ⁽⁶⁷⁾
7 薛原郎 (572～578)	(美室または真興王)	美室、上の寵をもって郎徒に号令す。故に郎徒、敢て多く言わず。すなわち(薛原郎) 七世風月主となる。 ⁽⁶⁸⁾
8 文 弩 (578～581?)	美室	真智の廢におよび、功をもって阿食に進み、始めて美室に寵せられ、すなわち仙花の位を得たり。すなわち八世風月主なり。 ⁽⁶⁹⁾
9 秘宝郎 (582?～585)	(不明)	
10 美 生 (585～588)	美室	美室曰く。我が寵時をもってすら、汝、尚かくの如し(略)、と。 ⁽⁷⁰⁾
11 夏 宗 (588～591)	(美室または思道)	夏宗は世宗殿君の子なり。母は美室宮主と曰ふ。故に亦、大元神統たり。文弩派服さず(略)。すなわち思道太后、詔をもって大いに郎徒を会しむ。 ⁽⁷¹⁾
12 菩 利 (591～594)	(任命者不明)	
13 龍 春 (594～?)	(任命者不明)	
14 虎 林 (?～609)	(任命者不明)	
15 庾 信 (609～?)	(任命者不明)	

* 歴代花郎の在位年で卒で囲んだ年立では『花郎世紀』に明記されるものであり、他の年立では「(花郎の位に) 居ること三年にして——に伝う」という記述から計算したものである。

さて、只召から真興王への政権移行時、つまり、真興王の意向が政に反映されるようになった時期に関しては明確でない。しかし、花郎の任命に関しては、王の単独かどうかは不明であるが、斯多含・世宗・薛原郎の三人の花郎の任命に、只召・美室と共に彼の存在が窺われ、二花郎までとは一線を画している。更に、『花郎世紀』によると真興王が「(美室を) 奉じて源花となし、二郎(世宗と薛原郎) をして郎徒を統率せしめ、これを朝せんとす。大王、(美室) 殿主と朝を南桃に受く。源花の制を廃すること二十九年にしてまた興る。すなわち大昌と改元す」⁽⁷²⁾ として、539

年に只召によって廃止されていた源花に、再び真興王が568年に美室を任命したことが記されており、真興王が花郎任命権を有していたことが知られ、またその頃を前後として『花郎世紀』から只召に対する記述が少なくなっていくことが興味深い。花郎任命権と『三国史記』から考察するに、推察ではあるが北齊から「使持節東夷校尉樂浪郡公新羅王」という官爵を受けた565年頃までには、真興王体制に移行していたものと考えられる。

さて、真興王の出家の問題であるが、真興王が出家をしたとするならば、その出家の時期を何時に比定するか問題となるところである。『三国史記』・『海東高僧伝』では同様に「末年に髪を剃って出家した」とされるが、その時期が明確にされていないための問題である。ここで、出家をするためには後継者の問題も重要問題となってくる。『三国史記』には「三十三年春正月、鴻濟と改元す。三月、王太子銅輪卒す」⁽⁷³⁾とし、また『花郎世紀』にも「鴻濟元年三月、銅太子、宝明宮の弊事を以て卒す。」⁽⁷⁴⁾とあり、572年3月の銅輪の夭折が知られる。ここで、新たなる太子の選出が必要となるが、この段階で真興王はまだ王位に就いていた訳である。長子銅輪の夭折の後、直ちに金輪（真智王）が太子となったのか不明であるが、真興王としても自らの意志で出家するのならば、少なくとも後継者を決めるまでは出家できず、いや、正確には真興王生存中に金輪が即位していなければならないはずである。しかし、現存史料及び、『花郎世紀』にも真興王生存中の譲位の記載はみられない。末年を死ぬ直前とでも解釈するのであろうか。それとも572年の銅太子の夭折を期に金輪を後継者として、名目だけの在位にして実権を放棄し出家したのであろうか。『三国史記』真興王条には572年以降の真興王主体なる記載がみられず、また『花郎世紀』にも花郎薛原郎代の花郎派閥間の争いに、「時に文弩一派、世宗に外に従いて、戦功あれども、位を得ず。薛原郎に服さずして、自ら一門を立つ。ここにおいて郎徒遂に分れる。薛派、もって正統我に在りとし、而して文派、もって清議我に在りとなす。互いに相い上下す。美室これを憂い世宗をしてこれを和せしめんとすも、得ず。而して真興大王崩ず」⁽⁷⁵⁾として、真興王の存在が度外視されていることなどからも、出家したとするならば572年以降とする可能性が考えられるところである。

また、真興王在位中に於ても、真興王の寵を受けた美室が花郎を任命したと考えられる記載があるが、明確なところでは真興王死去後の薛原郎の任命から美室が花郎任命権を有し、更に「真智大王、美室の故をもって立つことを得る。而して好色・放蕩なり。思道太后これを憂う。すなわち美室とこれを廃せんことを議し、すなわち弩里夫公をして、これを行なわしむ。弩里夫公は思道の兄なり。美室の夫世宗公と将に大事を挙げんとすも、文弩の徒の服さざることを恐る。（思道）太后、もって両徒を合わせ一になさんことを命じ、復た美室を奉じて源花となし、世宗を上仙となし、文弩を垂仙となし、薛原・秘室を左右花郎となし、美生を前方花郎となし、もってこれを鎮める」⁽⁷⁶⁾、「時に宮中に三太后ありて、政を行ふ。（真平）大王は、仁孝承順たり。故に郎徒の好進する者、多くは太后宮に付す。太上太后思道法主、美室宮主をもって法雲となす。故に政令多く美室宮より出ず」⁽⁷⁷⁾という注目すべき記載をみるところにより、六世紀時の真興・真智・真平王代に亘り、花郎の任命の他、王の即位・廃位にもある程度の女権の存在を認めざるをえない。

そして、これら女性の出家に関して『花郎世紀』では、

（イ）法興王妃保道

玉珍、専ら法興に寵せられ、保道をして尼となし、（魏花郎）公をもって臣となす。⁽⁷⁸⁾

(ロ) 真興王母只召・(ハ) 真興王妃淑明⁽⁷⁹⁾

(二花郎) 公、淑明公主と永興寺に出居し仏道に専心す。(只召) 太后も、亦、これが為に帰依し、肅太子〔王子〕も、亦、落彩受戒す。⁽⁸⁰⁾

(ニ) 美室

文弩、国仙をもって花郎の首となる。故に仙花と曰ふ。薛原、美室と永興寺に従う。後に(薛原郎は) 弥勒仙花と加号せらる。⁽⁸¹⁾

以上の出家が記されている。只、その出家の時期に関して現段階では確定できず、またそれら女性の出家の原因に関しては、純粹なる信仰に基づく出家と考えることも不可能ではないが、しかし、出家を強いられた法興王妃保道、真興王に実権を譲渡した後に出家したと考えられる只召、真興王死去の後に出家した真興王妃淑明、そして588年の花郎美生の任命以後に出家したと考えられる美室等、全ての出家が実権を喪失、または譲渡した後の出家という共通点がみられ、六世紀時の出家が権力保持と何等かの関係を有していたことが窺われる。

さ い ご に

以上、現存史料・金石文・『花郎世紀』等から、王族の出家と六世紀時の権力構造に関する当該箇所の記事を紹介してきた。これにより、新羅の仏教公認は法興王が主体となり王族の殉教を出すほどに仏教に期待を込めて公認しながらも、法興王を中心とした一部貴族内の信仰に留まり、問題とされる法興王の出家に関しては、もし実際に出家したとするならば譲位に伴う受動的なものとし、或は、クーデターを隠すための後代の潤色の可能性も考えられる。そしてクーデターがないとするならば、『海東高僧伝』法空条贊の「梁武を以て之に比するは非なる也。彼は人主を以て大同寺の奴と為り帝業を地に墜せり。法空は既に(王位を)遜きて、以て其の嗣を固め、自ら引きて沙門と為れり」⁽⁸²⁾ という記載の「嗣」とは『花郎世紀』による法興王死去の後に太子から降ろされた比臺であり、生存中は法興王の影響が依然と存することから、『海東高僧伝』の覚訓が梁の武帝と法興王の出家との相違を述べているに拘らず、梁の武帝のような「大乘菩薩的出家」とする必要があると考えられる。更に、法興王も含め、只召・真興王・美室等の出家が権力を喪失、あるいは譲渡後の出家と考えられることから、出家後の影響力の保持が問題となるところであるが、ともかくも新羅仏教が実権を掌握していた王、及び宮中の女性を中心に展開されていたことが諸史料から窺われるものである。

以上はあくまでも推論であり、問題提示をしたにすぎないが、今後、『花郎世紀』の真偽問題をも踏まえ、この小稿中に残された課題に対し研究を続けていくことを記し、ひとまず筆を擱くこととしたい。

注

- (1) 古人大兄皇子については、最近、遠山美都男氏『大化改新』(中公新書1119、中央公論社1993年2月)第4章に新しい解釈がある。もし遠山氏の解釈が妥当とするならば、古人大兄皇子の出家とは権力の放棄を意味しなければならない。
- (2) 『花郎世紀』の真偽に関しては、権眞永氏「筆写本花郎世紀の史料学的検討」(『歴史学報』第123輯、

1989年)。弘中芳男氏「権氏の説林——筆写本『花郎世紀』の史料学的検討について」(『韓国文化』7、8月号、1991年)を参照されたい。

- (3) 「王入宮見琴匣射之。乃内殿焚修僧。與宮主潜通而所奸也」(『三国遺事』卷第一紀異卷第一、射琴匣条、大正蔵第49巻、967c)
- (4) 『三国史記』新羅本紀では十五年となっているが、末松保和氏(「新羅仏教肇行の紀年」『新羅史の諸問題』東洋文庫、1954年)により『三国史記』の法興王の仏教公認の紀年が一年誤っていることが指摘され、筆者も末松氏に従うものである。
- (5) 『三国史記』卷第四新羅本紀第四、法興王条。
- (6) 「法興王既舉廢立寺。寺成。謝冕旒披方袍施宮戚為寺隸。主住其寺。躬任弘化。真興乃繼德重聖。承衰職処九五。威率百僚。号令畢備。因賜額大王興輪寺。前王姓金氏。出家法雲。字法空」(『三国遺事』卷第三興法第三、原宗興法条、大正蔵49、988a)
- (7) 「二十一年伐木天鏡林。欲立精舍。掃地得柱礎・石龕及階陛。果是往昔招提旧基。梁棟之用皆出此林。工既告畢。王遜位為僧。改名法空。念三衣瓦鉢。志行高遠。慧悲一切。因名其寺。曰大王興輪寺。以大王所住故也。此新羅初寺之始」(『海東高僧伝』卷第一、釈法空条、大正蔵50、1019a)
- (8) 「真興王立。諱多麥宗。時年七歳。法興王弟葛文王立宗之子也。母夫人金氏。法興王之女。妃朴氏思道夫人。王幼少。王太后摂政」(『三国史記』卷第四新羅本紀第四、真興王条)
「名多麥宗。一作深麥宗金氏。父即法興之弟立宋葛文王。母只召夫人。一作息道夫人」(『三国遺事』卷第一王曆、第二十四真興王条)
「第二十四真興王。即位時年十五歳。太后摂政。太后乃法興王之女子。立宗葛文王之妃」(『三国遺事』卷第一紀異卷第一、真興王条)
「釈法雲・俗名公交宗。諡曰真興。而法興王弟葛文王之子也。母金氏。生七歳即位」(『海東高僧伝』卷第一、釈法雲条)
以上のように、『三国遺事』真興王条のみ十五歳としているが、他は七歳の幼年即位とし、また真興王母は上記史料により法興王の娘只召と考えられる。
- (9) 『三国史記』卷第四新羅本紀第四、真興王条。
- (10) 「王幼年即祚。一心奉仏。至末年祝髮為浮屠。被法服自号法雲。受持禁戒。三業清浄。遂以終焉及其薨也」(『海東高僧伝』卷第一、釈法雲条、大正蔵50、1019b)
- (11) 「初興役之乙卯歳。王妃亦創永興寺。慕史氏之遺風。同王落彩為尼。名妙法。亦住永興寺。有年而終」(『三国遺事』卷第三興法第三、原宗興法条、大正蔵49、988a)
- (12) 「妃巴丑夫人出家名法流住永興寺」(『三国遺事』卷第一王曆第一、第二十三法興王条、大正蔵49、958c)
- (13) 「王妃亦奉仏為比丘尼。住永興寺焉」(『海東高僧伝』卷第一、釈法空条、大正蔵50、1019b)
- (14) 借字表記法および王妃名に関しては、南豊鉉「漢字、漢文의受容과借字表記法의發達」(『韓国古代文化と隣接文化との關係』韓国精神文化研究院編、1981年10月)、末松保和著『新羅史の諸問題』(東洋文庫、1954年11月、167～186頁)を参照されたい。しかしながら、王妃に関しては『花郎世紀』により、はたして一人に限定すべきかどうか若干の問題がある。
- (15) 「第二十四真興王。即位時年十五歳。太后摂政。太后乃法興王之女子。立宗葛文王之妃。終時削髮被法衣而逝」(『三国遺事』卷第一紀異卷第一、真興王条、大正蔵49、967c)
- (16) 「秋八月。王薨。諡曰真興。葬于哀公寺北峯。王幼年即位。一心奉仏。至末年祝髮被僧衣。自号法雲。以終其身。王妃亦效之為尼。住永興寺。及其薨也。国人以礼葬之」(『三国史記』卷第四新羅本紀第四、真興王三十七年条)

- (17) 「三十六年春二月。虜沙伐州。置一善州。以一吉滄日夫為軍主。永興寺塑仏自壞。未幾。真興王妃比丘尼死」(『三国史記』卷第四新羅本紀第四、真平王三十六年条)
- (18) 「妃思刁夫人英失角干之女剃髮為尼」(『三国遺事』卷第一王曆第一、第二十四真興王条、大正蔵49、959a)
- (19) 「第二十五真智王。名金輪一作舍輪金氏。父真興。母末比氏(丘)尼(英失角)干之女(思刀)一作色刁夫人朴氏」(『三国遺事』卷第一王曆第一、第二十五真智王条、大正蔵49、959a)
- (20) 「真興王立。諱多麥宗。時年七歳。法興王弟葛文王立宗之子也。母夫人金氏。法興王之女。妃朴氏思道夫人」(『三国史記』卷第四新羅本紀第四、真興王条)
「真智王立。諱舍輪。真興王次子。母思道夫人」(『三国史記』卷第四新羅本紀第四、真智王条)
- (21) 「按真興乃法興之姪子。妃思刀夫人朴氏。牟梁里英失角干之女。亦出家為尼。而非永興寺之創主也。則恐真字当作法。謂法興與之妃巴刁夫人為尼者之卒也。乃創寺立像之主故也」(『三国遺事』卷第三興法第三、原宗興法条。大正蔵49、988a)
- (22) 李基白氏は「三国時代仏教傳來と社会的性格」(『歴史學報』第六輯、1954年、)に於て、真平王三十六年甲戌条の記事は、真興王甲戌である真興王十五年甲戌(554)条に入れるべきであり、真興王妃は法興王妃になおされるべきである、とする。
- (23) 「五年春二月。興輪寺成」(『三国史記』卷第四新羅本紀第四、真興王条)
- (24) 「二十一年伐木天鏡林。欲立精舍。掃地得柱礎・石龕及階陛。果是往昔招提旧基。梁棟之用皆出此林。工既告畢。王遜位為僧。改名法空。念三衣瓦鉢。志行高遠。慧悲一切。因名其寺。曰大王興輪寺。以大王所住故也。此新羅初寺之始」(『海東高僧伝』卷第一、釈法空条。大正蔵50、1019a)
- (25) 『三国遺事』卷第三興法第三、原宗興法条。大正蔵49、987cでは「二十一年乙卯大伐天鏡林。始興工梁棟之材。皆於其林中取足。而階礎石龕皆有之。至真興王五年甲子。寺成」とし、同988aでは「初興役之乙卯歳。王妃亦創永興寺」とする。ここで『海東高僧伝』の記載も併せ、興輪寺及び永興寺の創建に関して二十一年という紀年に重きを置くと534年となり、乙卯という干支に重きを置くと535年となる。
- (26) 忽滑谷快天氏は、法興王代に未だ興輪寺が完成していなかったこと、また『三国史記』に王の譲位の記述がないことなどにより、法興王の生前の出家を否定している。(『朝鮮禪教史』1930年。名著刊行会により1969年、復刊)
- (27) 「僧伝與諸説亦以王妃出家名法雲。又真興王為法雲。又以為真興之妃名法雲。頗多疑混」(『三国遺事』卷第三興法第三、原宗興法条。大正49、988a)
- (28) 真興王母の出家に関して言及していないが、王及び王妃の出家に関して蔡印幻氏は『新羅仏教戒律思想研究』(該当箇所は205～209頁。国書刊行会、1977年)に於て史料を整理し、詳細にしている。参照されたし。
- (29) 李成市氏「蔚珍鳳坪新羅碑の基礎的研究」(『史学雑誌』98編-6号、1989年)
- (30) 深津行徳氏「迎日冷水里新羅碑について」(『韓』第116号、1990年)
- (31) 「十六年。下令禁殺生」(『三国史記』卷第四新羅本紀第四、法興王十六年条)
- (32) 深津行徳氏「迎日冷水里新羅碑について」(前掲)
- (33) 『三国史記』卷第七新羅本紀第七、文武王五年秋八月条。
- (34) 近年発見の金石文の釈文に関しては、田中俊明氏の詳細な研究(「新羅の金石文」『韓国文化』連載)がある。尚、本稿引用は田中氏「新羅の金石文～蔚州川前里書石・乙卯年銘ほか～」(『韓国文化』No.65、1985年3月号)による。
- (35) 田中俊明氏「新羅の金石文～蔚州川前里書石・乙卯年銘ほか～」(前掲)は、「乙卯年八月四日、聖

なる法興大王のとき、道人比丘僧の安及以、沙你僧の首乃至、居智伐村の衆士□人らが（この谷を）見て（その記念として）記す」として、安及以と首乃至の二人とする。

- (36) 私案であり、今後の検討を要する問題である。尚、深津行徳氏「蔚州川前里書石乙卯年銘文について」（東洋文化研究所所報、No.19、1992年）を参照されたい。
- (37) 丁仲煥氏「新羅의 仏敎傳來와 그 現世思想」（『曉城趙明基博士華甲記念仏敎史學論叢』1965年、韓国）
- (38) 浜田耕策氏「新羅太王号の成立とその特質」（『年報朝鮮學』第一号、1990年）
- (39) 末松保和氏「真興王磨雲嶺碑の発見」（『新羅史の諸問題』所収、1954年）
- (40) 田中俊明氏「新羅の金石文～蔚州川前里書石・己未年追銘（二）」（『韓国文化』No.63、12・1月号、1985年）
- (41) 『花郎世紀』を真撰とする最初期の論文は、李載浩氏の「花郎世紀의 史料的價値」（『精神文化研究』第38号、1989年5月）である。それに対して権憲永氏は「筆寫本花郎世紀의 史料的檢討」（『歴史學報』第123輯、1989年9月）に於て偽作説を説いている。尚、権憲永氏に対する論文として、弘中芳男氏の「権氏の『説林——筆写本花郎世紀の史料的檢討』について（上）（下）」（『韓国文化』7・8月号、1991年）がある。弘中氏は『花郎世紀』発見当初から積極的に論文を発表し、「金大問撰花郎世紀試訳」（『古代文化を考える』第20号、1989年）をはじめ「金大問撰花郎世紀（上）（下）」（『東アジアの古代文化』62・63号、1990年）、「花郎世紀にみる歴代風月主たちの横顔」（『季刊邪馬台国』43号、1990年）、「源花の制から花郎の制」（『古代日本海文化』13-9～12号、1991年）等、示唆に富む論文を発表し益するところが多い。その他、最近では、李鐘學氏「筆寫本花郎世紀의 史料的評價」（『慶熙史學』第16・17合輯、1991年）、崔光植氏「新羅의 花郎에 대한 新考察」（崔在錫教授停年退任紀念論叢『韓國의 社會와 歴史』一志社、1991年）など参照されたい。
- (42) 拙稿「新羅仏敎研究と花郎世紀」（『東方』第7号、1991年）を参照されたい。
- (43) 『三国史記』卷第四新羅本記第四、法興王十五年条。
- (44) 『海東高僧伝』卷第一、釈法空条、大正蔵50、1018c～1019a。
- (45) 『三国遺事』卷第三興法第三、原宗興法厭觸滅身条、大正蔵49、987bc。尚、当該箇所を書き下し文は、恩師野村耀昌博士の訳（国訳一切經和漢撰述部、史伝部十、大東出版社、1967年）に負う所が多い。
- (46) 『三国遺事』卷第三興法第三、原宗興法厭觸滅身条。

新羅本記。法興大王即位十四年。小臣異次頓爲法滅身。即蕭梁普通八年丁未。西竺達摩來金陵之歲也。是年朗智法師。亦始住靈鷲山開法。則大教興衰。必遠近相感一時。於此可信。元和中。南澗寺沙門一念。撰觸香墳禮佛結社文。載此事甚詳。其畧曰。昔在法興大王垂拱紫極之殿。俯察扶桑之域。以謂昔漢明感夢。佛法東流。寡人自登位。願爲蒼生・欲造修福滅罪之處。於是朝臣未測深意。唯遵理國之大義。不從建寺之神略。大王嘆曰。於戲寡人以不德。不承大業。上虧陰陽之造化。下無黎庶之歡。萬機之暇。留心釋風。誰與爲伴。粵有內養者。姓朴字厭觸其父未詳。祖阿珍宗・即習寶葛文王之子也。挺竹柏而爲質。抱水鏡而爲志。積善曾孫・望宮內之爪牙。聖朝忠臣・企河清之登侍。時年二十二。當充舍人。瞻仰龍顏。知情擊目。奏云。臣聞古人。問策薊薊。願以危罪啓諮。王曰。非爾所爲。舍人曰。爲國亡身・臣之大節。爲君盡命・民之直義。以謬傳辭・刑臣斬首。則萬民咸伏。不敢違教。王曰。解肉枰驅・將贖一鳥。洒血摧命・自怜七獸。朕意大利人。何殺無罪。汝雖作功德。不如避罪。舍人曰。一切難捨・不過身命。然小臣夕死。大教朝行。佛日再中・聖主長安。王曰。鸞鳳之子・幼有凌霄之心。鴻鵠之兒・生懷載波之勢。爾得如是。可謂大士之行乎。於焉大王權整威儀。風刁東西。霜仗南北。以召群臣。乃問卿等於我欲造精舍。故作留難於是群臣戰戰兢兢。僮伺作誓。指手東西。王喚舍人而詰之。舍人失色。無辭以對。大王忿怒。勅令斬之。有司縛到衙下。舍人作誓。

獄吏斬之。白乳湧出一丈天四黯黤・斜景爲之晦明。地六震動・雨花爲之飄落。聖人哀戚・沾悲淚於龍衣。家宰憂傷・流輕汗於蟬冕。甘泉忽渴・魚鼈爭躍。直木先折・猿獐群鳴。春宮連鑣之侶・泣血相顧。月庭交袖之朋・斷腸惜別。望柩聞聲。如喪考妣。咸謂子推割股・未足比其苦節。弘演割腹・詎能方其壯烈。此乃扶丹墀之信力・成阿道之本心・聖者也。遂乃葬北山之西嶺。

(47) 『花郎世紀』 魏花郎条。

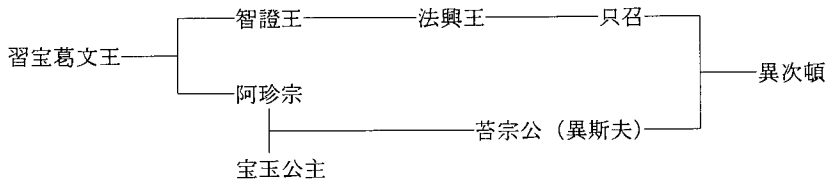
(48) 「太后女淑明宮主」(『花郎世紀』 魏花郎条)

「(淑明) 公主之父乃菩宗公也」(『花郎世紀』 二花郎条)

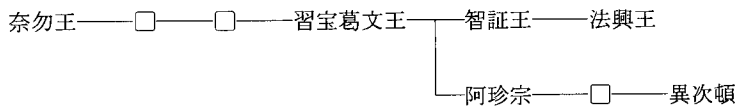
「世宗者菩宗公子也母曰只召太后也」(『花郎世紀』 世宗条)

(49) 『三国史記』 卷第四十四、列伝第四、異斯夫条。

(50) 推察の域をでないが、『花郎世紀』を併用することで以下なる図が成り立つと考えられる。



(51) 『花郎世紀』 発見以前にも金煥泰氏『韓国仏教史概説』(経書院、1986年)によって説かれ、韓普光氏も『新羅淨土思想の研究』(東方出版、1991年。該当部分56頁)に於て、次なる図とともに異次頓が朴氏ではなく、金氏であり、王族(法興王の甥)という金氏の説を紹介している。



(52) 李基白氏『新羅時代の国家仏教と儒教』(韓国研究叢書第三十五輯、韓国研究院、1978年)

(53) 注8

(54) 「只召太后當国而置花郎以公為其首號曰風月主。只召者保道女也。為立宗公夫人生真興大王。而法興大王愛玉珍宮主無立意。只召憂之公乃曉大義于玉珍而立之。時人莫不義」(『花郎世紀』 魏花郎条)

(55) 「公之子孫甚繁長女王玉珍宮主次女金珍夫人乃吾道夫人生也。玉珍初嫁英失公未幾受幸于法興大王生比臺公。大王欲立為太子。公諫之曰臣女無骨品而且與英失混處恐未可也。法興崩。只召太后降比臺公王子〔太子〕位以奉公祀」(『花郎世紀』 魏花郎条)

(56) 「玉珍專寵法興使保道為尼以公為臣」(『花郎世紀』 魏花郎条)

(57) 文暲鉉氏は「蔚州新羅書石銘記の新検討」(『慶北史学』第10輯、1987年7月)に於て、夫知王子郎□□夫知の不明箇所に深表をあてている。参照されたい。

(58) 私見ではあるが、筆者は己未年追銘の中心たる巡遊者が立宗葛文王・真興・法興王妃の他に真興王母たる只召(只没尸兮妃)も同行したものと考えている。

(59) 田中俊明氏「新羅の金石文～蔚州川前里書石・己未年追銘(二)」(前掲)

注8・注15

(60) 「公與淑明公主出居永興寺専心仏道太后亦為之改(婦)依書〔肅〕太〔王〕子亦落彩受戒」(『花郎世紀』 二花郎条)

- (61)「三山公女俊貞為源花多置郎徒。至是法興大王女南毛公主者乃百濟宝果公主生也亦絶色與公篤好。太后愛公而右南毛欲立為源花」(『花郎世紀』未珍夫条)
- (62) 推察の域をでないが、筆者は『花郎世紀』未珍夫条の「先是法興大王以玉珍宮私夫英失公為龍陽君寵居上位命破源花故俊貞事之勤沮破南毛。」という記載と、年代的問題から、俊貞任命に只召とともに法興王の存在も重要視している。
- (63)「太后乃廢源花以仙花為花郎號其衆曰風月號其頭曰風月主魏花公主之公副之」(『花郎世紀』未珍夫条)
- (64)「未珍夫為花郎以毛郎為副。(毛郎)有寵於太后真興大王九年太后命為三世風月主以慰南毛之靈」(『花郎世紀』毛郎条)
- (65)「開國五年毛郎公遊比斯伐得疾途卒郎徒乃願奉公。時公以太后寵常居宮中欲辭之郎徒曰魏公之子不居而誰可居乎太后乃命居之以為四世風月主使巡郡縣」(『花郎世紀』二花郎条)
- (66)「兎舍公有弟斯多含公大有妙梁之風郎徒多收之。時有武官郎者亦有人望多畜私徒聞斯多含公年少好義求與相見大悅曰公子誠古之信陵孟嘗也願事之。斯曰我何敢有乎乃收于公公乃奏太后曰兎舍之弟斯多含年未免艾而自有郎徒殆所謂國仙者乎。太后乃只宮中賜食問其懷人之道斯曰愛人如己而已善其善而已。太后奇之言於大王以為貴幢以掌宮門其徒千人莫不盡忠」(『花郎世紀』二花郎条)
- (67)「世宗者苔宗公子也母曰只召太后也。瑞雅美風儀孝于太后忠于大王大王亦極愛之曰是吾末弟也。少不禁束而公天姿極好無有失焉。太后擇公卿之美女聚于宮中而觀公最喜美室娘主而欲戲之太后大喜使美室入宮事之。先是斯多含公出征時美室作歌送之及收已入宮中為殿君夫人斯多含公乃作青鳥歌而悲之曰吾死為神兵保護殿君夫妻。臨卒二花公抱而哀之曰爾弟尚幼而爾若不起誰為之繼乎。斯曰臣妹美室之夫依毛郎公故事則不亦可乎。二花公乃奏太后請立之太后不肯曰吾子幼弱安能為乎。美室乃勸世宗曰從兄慕我而死臨死一言不聽則非丈夫也。世宗然之乃說太后得旨乃為六世風月主仍以薛花郎副之」(『花郎世紀』世宗条)
- (68)「薛花郎初名薛原郎者金珍娘主之私子也。其父菴成以郎徒美只善媚為仇利知龍陽臣仍通于娘主而生也。美風彩善玉笛而出微之故郎徒無奉意而美室以上寵號令郎徒故郎徒不敢多言乃為七世風月主以美生為副」(『花郎世紀』薛原郎条)
- (69)「及真智之廢以功進阿儵始寵于美室乃得仙花之位即八世風月主」(『花郎世紀』文弩条)
- (70)「美室曰以我寵時汝尚如此況我寵衰誰為夏宗計乎乃以夏宗副之」(『花郎世紀』美生条)
- (71)「夏宗者世宗殿君子也母曰美室宮主故亦為大元神統。文弩派不服故以二花子菩利公副之。菩利公之母乃淑明公主故真骨正統也。雖然主兄與副弟異派故自然不和美室宮主憂之乃以思道太后詔大会郎徒」(『花郎世紀』夏宗条)
- (72)「奉為源花使二郎統率郎徒而朝之大王與殿主受朝于南桃源花之制廢二十九年而復興乃改元大昌」(『花郎世紀』世宗条)
- (73)「三十三年春正月。改元鴻濟。三月。王太子銅輪卒」(『三国史記』卷第四、新羅本紀第四、真興王三十三年条)
- (74)「鴻濟元年三月銅太子以宝明宮癸事卒大王乃索太子」(『花郎世紀』世宗条)
- (75)「時文弩一派從世宗于外有戰功而不得位不服於薛原郎自立一門。於是郎徒遂分薛派以為正統在我而文派以為清議在我互相上下。美室憂之使世宗和之不得而真興大王崩」(『花郎世紀』薛原郎条)
- (76)「真智大王以美室之故得立而好色放蕩思道太后憂之乃與美室議廢之。乃使弩里夫公行之弩里夫公乃思道之兄也。與美室之夫世宗公將舉大事恐文弩之徒不服以太后命合兩徒為一復奉美室為源花。世宗為上仙文弩為垂仙薛原秘室為左右花郎美生為前方花郎以鎮之」(『花郎世紀』薛原郎条)
- (77)「時宮中有三太后行政大王仁孝承順故郎徒之好進者多付太后宮太上太后思道法主以美室宮主為法雲

故政令多出美室宮」(『花郎世紀』夏宗条)

(78) 注56。

(79) 『花郎世紀』には真興王妃思道の出家に関しては何等記すところがない。また淑明は苔宗公と只召の娘であり、真興王の胞妹であるが『花郎世紀』二花郎条によると、「時太后欲專上寵皆以公主奉之上以為其胞妹不甚愛公主亦然。公主之父乃苔宗公也時以上相為國柱石上以此不敢忽公主公主恃寵自蕩及生太子封為皇后益無忌憚。上素愛思道皇后欲以其子銅輪公為太子而不得。至是淑明后與公相通益甚累為上見上欲廢之太后泣諫之不得。上不幸淑明而淑明自有娠乃與公逃出群臣疑太子非上子乃以銅輪公為太子」として、真興王との間に子を生み、皇后となっていたことがしられる。

(80) 注60。

(81) 「文弩以国仙為花郎之首故曰仙花。薛原從美室于永興寺後加号弥勒仙花」(『花郎世紀』薛原郎条)

(82) 「以梁武比之非也。彼以人主為大同寺奴。帝業墜地。法空既遜讓以固其嗣。自引為沙門矣」(『海東高僧伝』巻第一、釈法空条、大正蔵50、1019b)
